

学部・研究科等の教育に関する現況分析結果

- | | | |
|----|--------|--------|
| 1. | 医学部 | 教育 1-1 |
| 2. | 医学系研究科 | 教育 2-1 |

医学部

I	教育水準	教育 1-2
II	質の向上度	教育 1-5

I 教育水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 教育の実施体制

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「基本的組織の編成」については、臨床医学は 19 講座を 2 大講座（内科学・外科学）と 14 講座に再編するとともに教育の充実を図るため看護師、薬剤師、助産師等のコメディカルスタッフを学内特別講師として教育を行わせているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制」については、教育センターを設置して専任教授を配置して教育内容・方法の改善に向けての推進体制の一元化は評価できる。また、授業評価の結果を教員研究費の傾斜配分額決定の評価項目に加えたなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育の実施体制は、医学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 教育内容

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「教育課程の編成」については、一般教育科目については両学科合同で実施している点は評価できる。また、リメディアル教育の実施は高く評価できるなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「学生や社会からの要請への対応」については、卒業生・父母によるアンケート結果を見

ると、医学科では、教育・研究環境における施設・設備面に不満とする答えが約9%（やや不満8.0%、非常に不満1.3%）であり、看護学科では、専門技術の修得に約16%が不満（やや不満14.5%、非常に不満1.4%）としているが、全般的には、おおむね高く評価されているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育内容は、医学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間における判定として確定する。

3. 教育方法

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「授業形態の組合せと学習指導法の工夫」については、授業形態及びその比率に関して、医学科では講義65%、演習・実習35%、看護学科では講義73%、演習・実習27%とバランスよく配置されている。また、各学科において、シラバスを意識した授業構成をしているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「主体的な学習を促す取組」については、学習の場として通年24時間開放の図書館やチュートリアル室の確保は評価でき、全教員がオフィスアワーを設けているのは高く評価できるなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、医学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育方法は、医学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間における判定として確定する。

4. 学業の成果

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「学生が身に付けた学力や資質・能力」については、学生トレースシステムの構築はうまく稼働すれば評価できると推察されるが、医師国家試験の合格率は平成 20 年の全国平均合格率より若干低い。一方、看護師の国家試験合格率は一貫して全国平均合格率より高いなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「学業の成果に関する学生の評価」については、講義に対する学生評価は平成 19 年度で 5 段階評価の 4.05 と高く、この評価は学生自身の学業成果とほぼ比例すると評価できるなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、学業の成果は、医学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

5. 進路・就職の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「卒業（修了）後の進路の状況」については、就職率が高いのは当然であるが、北海道内の就職が、医学科で 60～70% を占め、看護学科では、90% 近い年もあるが、これらは北海道という地域性もあるが高く評価できるなどの優れた成果があることから、期待される水準を上回ると判断される。

「関係者からの評価」については、臨床実習の形式を診療参加型に変えることにより技術が身に付いているという評価を受けている。看護学科では 40% 弱の学生が専門技術の修得にほぼ満足しており、医学科においては、この評価と一致して、卒業生の評価でも専門技術の修得に 72% が満足しているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、進路・就職の状況は、医学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

改善、向上しているとはいえない

[判断理由]

「高い質（水準）を維持している」と判断された事例が 1 件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が 1 件、「改善、向上しているとはいえない」と判断された事例が 1 件であった。

「改善、向上しているとはいえない」と判断された事例の判断理由は以下のとおりである。

○「医学チュートリアルの実施による自学自習の精神の涵養」については、医学チュートリアルに対する評価が上昇している資料が示されていないため判断できない。以上のことから、改善、向上しているとはいえないと判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、判定を以下のとおり変更し、第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「高い質（水準）を維持している」と判断された事例が 1 件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が 2 件であった。

医学系研究科

I	教育水準	教育 2-2
II	質の向上度	教育 2-5

I 教育水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 教育の実施体制

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「基本的組織の編成」については、学生の収容定員数 137 名に対し在籍者数 114 名であり、大学院指導教員数も適切に配置され、教員一名当たりの学生数も 0.65 名と十分指導できる数であるなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制」については、大学院博士課程の医学専攻を改組し、4 専攻を医学専攻の 1 専攻に集約して、研究者コースと臨床研究者コースに教育課程を編成した。なおかつ入学定員を半分にし、適正化を図るなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医学系研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育の実施体制は、医学系研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 教育内容

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「教育課程の編成」については、大学院修士課程において所属領域の専門科目 20 単位、共通科目から 2 単位、所属領域以外の特論及び演習の中から 8 単位以上、すなわち計 30 単位以上履修することが修了要件であり、博士課程では共通科目 12 単位と専門科目の修了単位 20 単位以上、計 32 単位以上履修することが修了要件である。授業としては共通科目の

比重が大きく、実験、実習や演習が重視されているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「学生や社会からの要請への対応」については、授業料の半額相当を給付する奨学金制度を設けたのは評価できる。大学院の博士課程修了生に対するアンケートで、「医学教育者」「医学研究者」「高度専門職業人」の育成を教育目標としており、この教育目標がどの程度達成されたかという質問に対する回答として、「どちらともいえない」というものが 72.7%も占めており、直ちに効果は上がってはいないものの、教育目標は明確になっているので今後が期待できるなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医学系研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育内容は、医学系研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

3. 教育方法

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「授業形態の組合せと学習指導法の工夫」については、大学院修士課程では社会人学生が多いことから、指導教員とマンツーマンで対話・討論型授業を展開したり、夏季・冬季休業中及び夜間・土日の研究指導、博士課程では 18 時からの講義を開講したりして学習指導法の工夫をしている。さらに、長期履修コースも設置され、ティーチング・アシスタント（TA）、リサーチ・アシスタント（RA）としての採用も十分行われているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「主体的な学習を促す取組」については、学生が主体的に自由な学習ができる環境の整備として、情報処理室や、図書館の 24 時間利用可能となっている。修士課程修了生の教育・研究環境における施設・設備面における満足度は 44.5%、博士課程修了生の満足度は 45.5%であり、半数弱の修了生が満足しているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医学系研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教

育方法は、医学系研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

4. 学業の成果

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「学生が身に付けた学力や資質・能力」については、大学院における成績評価は授業科目の試験や研究の進捗状況から総合的に評価され、修了認定は取得された単位数に加え学位論文審査及び最終試験の合否によって適正に行われており、また、大学院修士課程、博士課程共に高い修了率を示しているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「学業の成果に関する学生の評価」については、博士課程修了生の大学院で受けた教育内容に対して「満足している」と回答したのは 27.3%とやや低いが、大学院修士課程修了生では 44.5%でほぼ適当であり、これは学生の向上心の反映と思われるなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医学系研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、学業の成果は、医学系研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

5. 進路・就職の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「卒業（修了）後の進路の状況」については、大学院修了者は元々職業に就いている者が多く、ほとんどが看護師・教員・医師及び臨床研究・基礎医学研究に従事しており、先進医療の提供及び地域医療に貢献しているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「関係者からの評価」については、過去5年間の大学院修了者を対象とした教育内容・方法等に関するアンケート調査では約半数が教育内容全体に満足しており、教育内容に対する継続的な評価体制の整備も検討されているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医学系研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、進路・就職の状況は、医学系研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が1件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が2件であった。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間終了時における判定として確定する。